

曳尾庵の認めし所なるが、今やその形をあたりに現はさず、他日の探究に待たんと欲す。終に附記したきは、同年六月、予が長崎に出張して、稻佐の悟真寺(浄土宗)に舊阿蘭陀人の墓地を探るや、一隅に^{右方}、蒲鉾形の大なる耶教徒の墓碑の存するを發見したり。^{手前}長さ四尺に近く、三箇の石を連接せるものにして、表面には銘文なく、一端の側面に、大な十字章下に例の H S 三文字を結付けたる記號を刻し、その面の縁にはローマ字らしき文字彫りつけられたり。予は同行せる長崎の探古家古賀十二郎氏に之を指摘し、その研究と發掘とを希望しおきたりしが如何になりけん未だ報道に接せず。大小の差こそあれ形式に於ては成願寺の分と似たる所大にして、彼此相比較せば或は得る所なきにあらざるべし。予輩は切に同地に於ける攷究の進まんことを望みて止まざるなり。

若夫れ、京都の所謂南蠻寺の位置に關して今回

の發見より得たる暗示が、從來東西の史乘地誌によりて識られたる結果と相待ちて、そのがはの攷究を一步進め得べきことは、疑なしと雖も、それらの點につきては別に論せんことを期す。南蠻寺の破壊等に關しても、其節説及ぶ所あるべし。

(大正六年十二月四日)

加藤清正の間島進入に就て

陸軍歩兵中佐 竹 内 榮

緒 言

豊臣秀吉の外征は、單に其の結果より觀れば、失敗たるに相違なきも、興國日本の海外發展史を飾るべき、一大壯舉たるを失はず。秀吉外征の目的が、東亞の大陸を攻略して一大帝國を建設せんとするにありたるは、疑を容れざる所にして、秀吉は今日の所謂亞細亞主義の第一開拓者と謂ふべし、就中秀吉の驍將加藤清正は、此開拓者の急

先鋒にして、千里孤軍を提げて、遠く北鮮國境外兀良哈の胡域に進み、日露戰爭に於てすら、我軍の入るを得ざりし間島の要地を踏破せるの快舉は、今日の國民に多大の教訓を垂るゝものあり。

予は昨大正五年春及本年春の二回に亘り、親しく間島の一部並北鮮の國境を實査し、公餘聊々清正の行動に關する戰史的事蹟を、研究するの機會を得たるを以て茲に其一端を概述して、古英雄の偉烈を追想せん。

本研究に引照せる主要の古文書、並清正の行動に對する大體の觀察、池内文學士の示教に據れるもの多く、又間島に於ける實地調査資料の蒐集は予の實査せるもの、外、間島に在勤せる某友人の熱心なる幫助に負ふ所大なり。

兀良哈攻伐の意義

加藤清正の一軍が、豆滿江を渡りて進入せる兀良哈の地域は、勇敢にして武を好める女真種族の

住地にして、今日の所謂間島の東部に相當せり。清正高麗陣覺書（清正の右筆たりし下川兵太夫の手記と信すべきもの）に、其の民情を述べて『おらんかいと申所は、弓取多く、事の外すくやかなる國』と云へり。嚴密に言へば『おらんかい』は明の時代北鮮國境方面に於ける女真種族の汎稱にして、土地の名稱にあらざるも、此等は屢々同様に用ひらるゝの例多きを以て、強て之を區別する必要あらざるべし。

清正が兀良哈を攻伐したる動機は明確ならざるも、從來の研究に依れば、概ね左の事情に依りたるものと推定せらる。

一日本の武威を輝かさんが爲め、武士的名譽心に出でたること。

二豆滿江外、兀良哈人の侵略に惱める國境の鮮

人が、其の膺懲を清正に要請したること。

是れ實に穩當の觀察に相違なきも、兀良哈の狀況

に關し、文祿元年九月二十日附を以て、清正より秀吉に呈出せる左記報告書は、此の研究に關し、更に他の着眼點を吾人に教示せり。

先書に如令申候、威鏡道の儀、指出已下御置目度悉申付候て隙明候付而、吾良哈へ相働、彼國之様子爲レ可ニ申上。二十日路は、打入、糧味見合、此口より大明國へ御人數被レ成可か見及申候處、一圓甲地無レ之、島所ゆへ、さこくまでにて、兵糧無之に付て先威鏡道へ打入引上るの意候事

此の報告書に依りて之を考ふれば、良好なる領土を獲得せんとするの企圖並明國侵入路の偵察も亦兀良哈攻伐の原因たりしが如し。

攻伐の季節及兵力

大陸に於ては、季節の作戦に及ばず影響大なるや言を待たず。殊に甲冑を裝うて戰鬪すべき日本武士に取りては、酷熱沍寒共に大敵たり。是故に清正の行動中、最も括目すべき兀良哈攻伐は、先づ如何なる季節に於て行はれたるやを講究するの必要あり。清正の會寧占領は、文祿元年七月廿三

日にして、炎熱の候懸軍長驅幾多の困難を冒し漸く會寧に到達したるものなるを以て、占領後直ちに情況不明の異域に兵を動かすが如きは、事理に合せざるのみならず、會寧占領の當時は、清正も未だ朝鮮國王の所在を知らず、王子一行の逃走せるもの等ありて、同月二十七日附九鬼廣隆宛の書狀の一節に『爰許今少山中をもさがし、王孫並官人等相尋候而、其隙明次第に、おらんかいへ一働はたらくへきかど成_レ其意_レ候』とあるを見るも、少くも七月中に會寧を出發せしものと考ふること能はず。次に兀良哈攻伐の日數約十日間なりしこと、前掲九月二十日附清正の報告書に依りて之を知るを得べく、清正が最後に江を渡りて鍾城に入りたるは、朝鮮側の記録(北關誌)に依り、八月十五日頃なるを以て、清正會寧の出發は八月初旬と推定するを妥當とす。是恰も陽曆の初秋に當り、湖北の地殘暑尙ほ未だ去らざるも、輕裝して軍隊

を行動せしむるに恰好の季節たり。

攻伐に従へる清正の兵力は詳ならざるも、其編組に鮮人兵を加へたることは事實なるが如し。元來加藤軍出兵の總數は、約一萬人と稱するも、人員補充の道なく、且つ衛生施設極めて不備なる當時の常として、釜山上陸後長途の行軍に於て、其の減耗多大なりしのみならず、咸鏡道進入後は、後方の守備等に殘置せる兵力又尠からざりしなるべし。

清正記に、會寧の鮮人五百、清正の手兵六百を以て、初期の攻城に従事したるの記事あり。此の記録は必ずしも信賴するに足らざるも一般の情況上間島に進入せる加藤軍の兵力は一千人以内と推定して大過なかるべし。鮮人の如きは、今日に於ても、給養極めて簡單なるを以て、如上の兵數ならば間島地方に於ける行動敢て難しとせず。要するに清正が日本兵を中堅とし、地理に明かなる朝鮮

兵を補助とせる集成部隊を以て未知の地に進入し、慄悍の敵に向ひたるは適當の處置と云ふべく、嘗て歐亞を蹂躪せる蒙古遠征軍の編組も亦概ね此の方法を採るを例とせり。

攻伐の事蹟

兀良哈攻伐の事蹟は明瞭を欠くも、攻伐後清正の秀吉に送致せる報告、清正高麗陣覺書、同書の異本たる清正朝鮮記及古橋又玄の清正記等に據り其概要を想像するに難からず。就中清正の報告の一節に、『吾良哈百姓已下之躰、爲守護者無之。むかしの伊賀甲賀のごとくにて一在所一在所構要害有之付而、四五所令成敗候因茲殘所何も明退申候間、放火仕先打入(引上ぐるの義)申候事』とあるは、實に簡潔にして要を得、概ね高麗陣覺書等の記事と一致せり。

高麗陣覺書及清正朝鮮記に傳へられたる、戰鬥の情況は、可なり詳細にして固より從軍者の記憶

の間違等尠なからざるべきも、今日に於て參考とすべき重要な資料たり。今之を摘録すれば左の如し。

清正さらば日本人の弓矢取候様子、おらんかい人に弓矢取候て見せ可申、是よりいか程おくに勢は多く候やと被レ尋候へは、是(會寧の意)より四里半程行候て在所御座候、夫より一里許行候得者、城十三御座候通申候夫よりまた一里路行候得は、おらんかいの都御座候通申候、さらば、はいれく(會寧の意)の者先手仕候へ、彼の所へ御取懸け候て、日本人の手なみを見せ候するの儀にて、味方うち無レ之様にさ候て、はいれくの者三千計の者には、南無妙法蓮華經の題目を、鎧にも笠にも書附候て、先へおし立、日本人八千餘、都合一萬千餘騎にて彼所におし寄られ候、明る早天に城十三有之所に着陣す、異國の習にて前をば堅固にかこひ候へども、後は深山高石垣を頼、さのみ防申體不相見候に付、はいれく人をば前へやり日本人は後の山へかゝり、當に五十人三十人にて引申程の石を、かなでこにて掘崩し、山より下へおさしかけ候へは、麓に有レ之家さも悉うちつぶし鐵砲をうちかけ申候に付、おらんかい人三罷成退散仕候、其十三城の内川上の方の名城一つをば清正自身取懸られ乘崩申候、其時清正内貴田孫兵衛と申もの、名譽のくみうち高名仕候て疵をかうむり、清正ひざの上にて看病被レ成被レ遣候事

(高麗陣覺書)

右の城十三悉取候て、其夜は其所の河下に野陣を被レ成候惣勢へ清正より下知被レ仕候は、おらんかいの都程近にて候間定て夜打をかけ可申候條、少も油斷仕間敷旨手かたく被レ申觸候あんのかの如く其夜の半時分に夜うち參候、此方にも油斷不仕候に付て、取合、夜討のものを追搦、數百人討捕申候、其時主計頭下知仕候は、勢の多少を敵にみすかさされ候てはなるまじく候間、追付此方よりよせ候はんとの儀にて、諸勢打立夜中に五六里(清正記には二三里と記す)ほどまいり候へば、明る早天におらんかいの都に着陣候、そこにて山の岡より、おらんかいの都を見おろし候へば日本の都五つ程合せたる大分家御座候(清正記には「日本の都二つ程もあらんさ見ぬし」とあり)、そこにて鐵砲をうち、そるへうち(一齊射擊の義)なごつかまつり(清正記には「五百挺の鐵砲を山上より搦打」とあり)大貝吹き立さりかけられ候へば、内裏をわけのき申候に付て、先一番に内裏に火をかけそれより方々手分仕り爰にてもはや鐵砲も不入候、家を大分焼き候事肝要にて候間、其心得仕候へこ、下知被レ申に付て、一萬餘騎のもの共一人して五十所、三十所に火をかけ申候大國のみやこにて候へば、百が一程もやけ不レ申候事

(清正朝鮮記)

次に高麗陣覺書に掲げられたる記事は、加藤軍撤去の情況にして、清正は「五六里程高麗の方へ引取山陣を取」翌日を以て朝鮮國境内に退却を豫

期せるに、敵軍大舉して攻勢に轉じ、清正の陣地を攻撃し來りたるを以て、清正自ら陣頭に立ち、逆襲に轉じて敵を撃退し、翌日穩城に向ひ退却せしことを叙せり。此戰鬪當日、『俄に大雨殊之外降て、おらんかい人のつらへ吹きかけ』敵の攻撃を困難ならしめたるの状況を説き、尙清正記には『おらんかい人の死屍をかそへければ、九百七十三人討取、味方討死、侍九人、雜兵七十九人』と記せり。

以上の記事中には誇張の言辭からざるべきも、其要點を綜合すれば、大凡左の如くなるべし。

- 一、加藤軍は會寧出發後兀良哈の部に到着する迄に、一部を以て數多の城を攻略し、其の中の一城に對しては主將の指揮を以て之を攻撃したること。
- 二、清正の進路は河流に沿うて下り敵都攻撃の前夜は下流の野に陣し、敵の夜退を撃退したる後直ちに、敵を追撃すること、四五里若しくは二三里にして、兀良哈の都を眼下に望見し得べき高地に達したること。
- 三、兀良哈の都を瞰制すべき高地上より敵を射撃し、敵兵退却

後進んで多數の家屋に火を放ち、退却に就きたること。
四、兀良哈の都は谷地に集團せる大住民地にして、住民地を直接に防禦すべき城廓等なかりしこと。

五、退却に方り清正の占領したる山上陣地は、兀良哈の都及朝鮮國境を距ること共に約一日行程の地點にして、敵を制すべき良好の高地たりしこと。

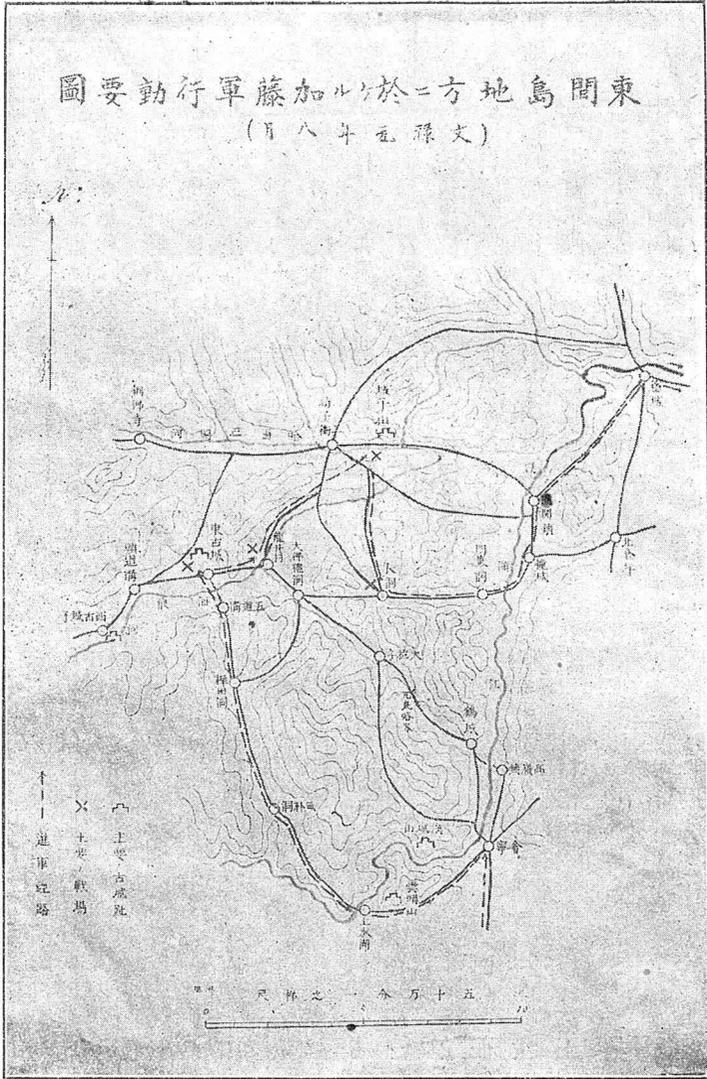
最後の戰鬪は最大の激戰にして、敵の追撃に大打撃を與へたる後朝鮮國境内に退却したること。

清正の退却路は前進路と異りて、門巖に於て豆滿江を渡河し、鐘城を経て穩城に入り、爾後慶源慶興を經、東海岸の沿海路を取り、鏡城に歸還したること疑を容れず。此の點に於ては朝鮮側諸記録の記事全く一致せり。高麗陣覺書には、穩城に於て五日間の休養をなし、東行五日の後西水羅に出てたることを記し、清正記には西水羅より『三里路戻り横道に歸陣』せるを傳ふ。

地理上の研究 (附圖)

前掲の諸文籍に傳へられたる兀良哈攻伐の事蹟を精讀し之を現時の地理に照合するに、大跡に於

東間島地方に於ける加藤軍行動要圖
 (天文元年八月)



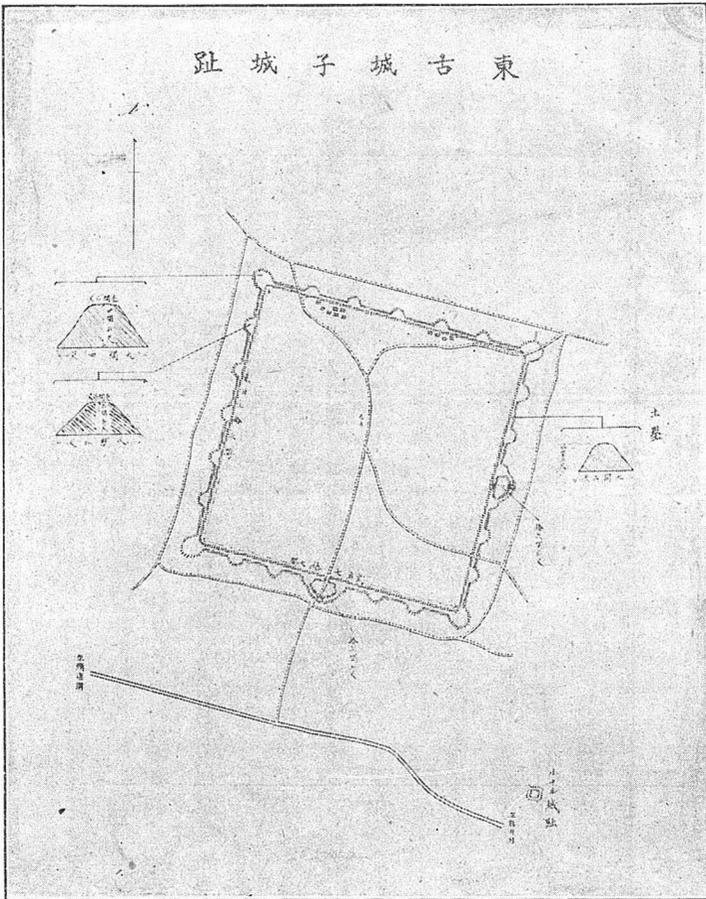
て清正の行動地域を判定するに難からず。

抑々間島一帯の地方は概ね農作に適し、古來幾多民族爭奪の要地たりしを以て到る處に古城趾、古墳、古器物、古瓦等の散在せるあり。就中哈爾巴通河及海浪河の谷地は低き丘岡連互し、地味豊沃なる一大盆地にして、往昔大なる住民地の趾と推定し得べき地點亦尠しとせず。前掲清正の報告書中に、雜穀を産する島所と謂へるは即ち此地域に相當し、所謂兀良哈の都なるものも此盆地内の中心的住民地たりしならん。而して此の舊都の所在地に關し、内藤博士は嘗つて之を海浪河の流域にある竜井村附近に擬し、池内學士は一步を進めて哈爾巴通河の河畔局子街若くは城子山附近に擬せるも、要するに史料不備の爲今日に於て的確なる斷定を下すこと蓋し難かるべし。

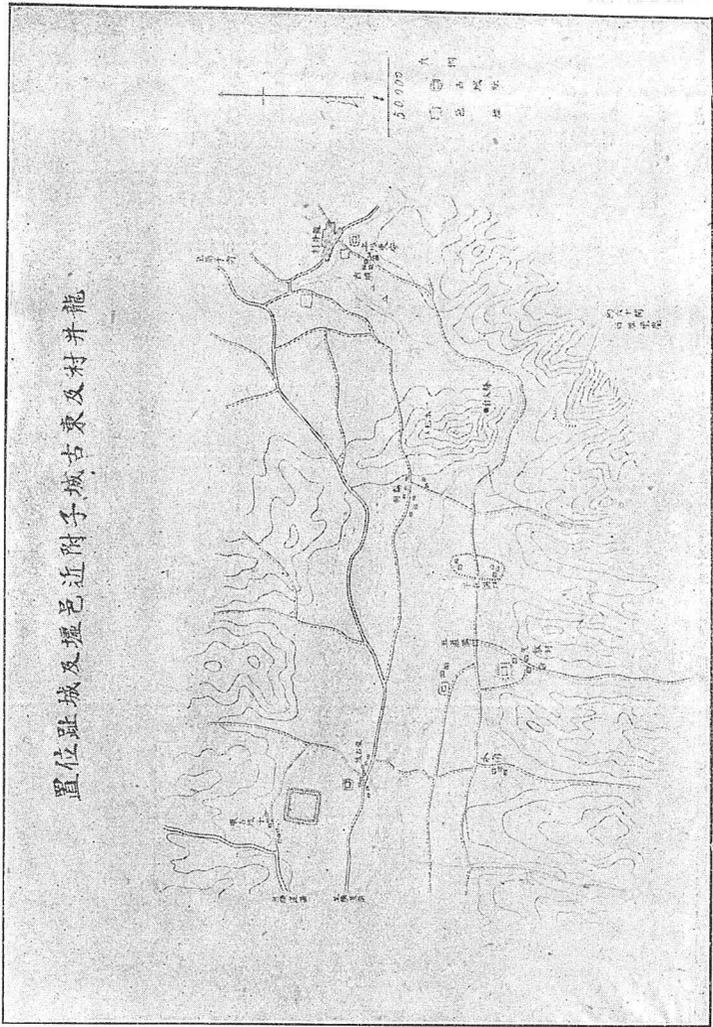
想ふに城子山は標高約四百米突の山城にして、清正の攻伐せる兀良哈の敵都は平地の大住民と認

め得べきを以て、城子山上の古城趾と相容れず。元來山城の目的は戰時市邑住民の避難所に供するにあるを以て、市邑は山城に近く住居に便利なる平地にありたるものと推定せざるべからず。而して此の城子山附近と、渾春方面並北鮮國境潼關鎮鐘城方面との交通路を觀察し、尙城子山より局子街の北方高地に互り現存せる一帯の土壘等に鑑みるときは、城子山附近は東間島の要點にして就中城子山西方哈爾巴通河の谷地には、恰も現時の局子街に相當せる東間島地方の中心的都邑存在せしことあらざるかを推想せしむ。此の都邑こそ嘗つて金末元明の時代を通じて此方面に存在したる南京と稱する古都に相當すべく、池内學士の着眼せるが如く、假りに南京の古都を以て清正の所謂兀良哈の都に擬し得るものとせば、加藤軍が敵の夜襲を撃退し、同夜直ちに追撃を行ふて到着したる高地は、恰も哈爾巴通河右岸の高地にして、山上

より此の都の敵を俯瞰して一齊射撃を行ひたるの記事に一致するに似たり高麗陣覺書の所謂十三城なるものは、前に掲げたる清正の報告中に記したる如く、防禦施設を有する部落に外ならずして、現地研究の結果池内學士の推測の如く、之を海浪河の流域に現在せる多數の城趾及邑墟に推定して可なり。而して加藤軍は會寧より海浪河流域に進出する爲、鶴城及兀良哈峯を経由する現時の會寧龍井村街道若しくは會



龍井及東子附近邑壘城址位置



寧より漢城山北方谷地を経て大拉子に通ずる舊街道に依らずして、寧ろ會寧西方約三里雲頭山西南麓附近に於て豆滿江を渡り、感朴洞及五道溝附近を経て東古城附近に到りたるにあらざるか。此道は豆滿江畔の名城たる雲頭山の古城と、海浪河畔の名城たる東古城子の舊城とを連ぬる比較的良好の通路にして、現時尙能く牛車を通ず。雲頭城は俗に五國城と稱し、金末蒲鮮滿奴以來北關方面の雄鎮たりしこと既に定論あるを以て茲に贅せず。東古城子の城趾は方形の土壘を以て圍繞し、壘壁は約四十間毎に側防施設を有し、一面の長さ二百七十七間に達し、海浪河流域に現存の諸城趾中最も完備せるものなり。故に高麗陣覺書に特筆せる「川上の方の名城」は、或は東古城子の城趾に擬するを得べし。次に東古城子の下流約二里龍井村附近には、多數の古墳、邑墟散在せるに徴すれば、嘗つて清正の攻略せる最終の部落存在したるが如く推想せらる、敵都攻撃の前夜敵の夜襲を撃退せる河畔の地點も、全般の關係上或は龍井村近傍に擬定するを得べし。龍井村より局子街附近哈爾巴通河の谷地を望見し得べき高地に至るには三四里に過ぎずして、清正の夜間に敵を追撃したる距離と略一致するが如し。加藤軍の退却に當り、優勢なる敵の追撃部隊を撃破したる山上の陣地は、局子街と鐘城との中間地區に於て之を求めざるべからず。現地實査の結果に依るに、長洞西北方高地（局子街南方約五里）は、局子街若くは龍井村方面より鐘城方面に通ずる主道路を制し、北方より南進する敵を邀撃すべき有利の陣地にして、朝鮮國境より恰も一日行程の距離にあり。是或は東間島に於て日本武士の手腕を發揮せる最終の古戰場にあらざるなきか。

結 尾

百事整頓せる現代に於てすら、給養其の他の關

係上僅に數百の軍隊を北鮮地方に動かすの困難なること、吾人の實驗せる所なり。然るに今より三百有餘年前の昔に於て、加藤清正の一軍が決意國境の大江を超えて先人未到の胡地に進入し、更に馬首を轉じて豆滿江畔の廣大なる地境を踏破したるの事蹟は、其壯烈なる意氣眞に嘆賞に値す。況んや其行動たる我國民の先驅として一大偵察を遂行せるものと認め得べきに於てをや。清正が夜暗に乗じ、兵力を秘して敵の根據を衝き、直ちに軍を撤して鮮地に歸還したる動作の如きは、今日の所謂偵察戰の要領に彷彿たるものあり。其の他清正の行動に對し、今日の戰術上より批判すべき興味ある問題亦尠からざるも他日更に論ずるの機會あるべし。(大正六年十月稿)

武者修業に就て(上)

下川潮

一序 言

我國に於ては、古來武士が劔槍等の武術を或る程度迄修行したる後、更に諸國を遍歴して、或は所在の武藝家と技を角し、或は山野に伏する等、あらゆる艱難を嘗めて其技術を研き、心膽を練ることを稱して、普通に之を武者修行と云ひ、又兵法修行とも云ふ。而して此武者修行は古くより演劇稗史軍談等によりて人口に膾炙せられ、且つ明治大正の御代にも尙往々行はれつゝあるに拘はらず、其如何にして起り、如何にして發達變遷せしものなるか、又我國以外の外國にはなかりしや否や、これ等の問題に關する確實なる智識を吾人に與ふる研究の發表せられたるもの殆んど之あるを